

船三隻が同時に接岸できるようにする。また新佐伯港の東側に幅二十メートルの港湾道路と敷き、市が事業計画となてている中江川河川埋立て道路と結ぶ。(つづく)

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

——主として木材の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校教諭
同 枝野士徳クラブ顧問

本会員 市野 瀬 仁

第二章 佐伯港

四、佐伯港における臨海工業の動向(つづき)

ロ、工業立地の地域的特色

○海上輸送便利

ここに「工業立地要因」を元にして、各種企業が必要とする諸条件を一つの物指で、佐伯の工場に当てはめてみよう。

興人が「用水豊富」に問題があつたり、造船所が「用地の広い」に難点があつても、それは決定的に行きすぎた程度ではない。セメントの「原料の豊富であること」や、興人の「用地の広い」は勿論のこと、ニ平合板においてはもたさの点は満足される。「陸上輸送便利」の点では興人の利用度が大きく、九州地区を担当する八代工場と共に、佐伯工場としてはけつして悪くはない。とくに

「海上輸送の便利」は「陸上輸送の便利」を補つて、コンテナ輸送、大型輸送、スピード輸送、フェリー輸送、高度のスイステム、等のように価値を高くしている。しかしこのように近代機械がふりは、また地方の港湾には十分に發揮されてはいない。

まとめると、佐伯の四工場に共通的要因として「海上輸送の便利」が第一に上げられる。このことは港の生命であつて、佐伯港の最高の特色であると共に、海洋国日本、貿易立国の日本の港としての最重要条件であるところに、御上港展の可能性があることを認めたい。また工場との関係だけでなく、外材の中継地として商業活動が行われ、地場産業である木材製造業とも結びついて、良港の名を日しいままにしているところに特色をもつといえよう。

○「消費地に近い」条件は、経済発展の原則として重要な条件である。京浜、中京、阪神の巨大な工業地帯を中心に太平洋岸の工業ベルト地帯が形成されたのはそのよい例である。しかし多くの矛盾がおきたので、工業の分散という社会政策を取らざるを得なくなつた。

「消費地に近い」所は効率の悪いばかりであつて、それでも、最近のように輸送機関の進歩と運送システムの合理化により、中央より離れた工業都市でも採算が合う地域もできた。その代表的なものが新産柳の優等生と云われる大分鶴崎臨海工業地帯である。

佐伯は大分市の発展によりかなりの影響もあるだろうが、佐伯の業種はさほど「消費地に近い」という条件はおまり問題にならない。むしろ港湾施設が整備されれば地方であるが故に、経済価値を持つという要素がかなりある。

○「労働力が得やすい」
倒産した久米工業の若く社長にお会いした際、どうしてここに設立したかと聞いた。社長は労働力があるからと一番の指を折った。また完般、但許市のサントリー工場を見学した際も、案内者が「ここ云つてはいるいんですが、地方は労働力が得やすいですから」と遠慮気味に話していた。私達の周囲を見ては、農業人は急激に減少し、商工業に勤める人が多くなった。佐伯の各産工場を見学するとき、思ひがけぬ所で薪を切りぬき、鍛冶で働いていた旧知人に接して驚くことがしばしばある。こうしたとき、書物ばかり見たことではなく、産業の革命が進行している御上の姿を実感としてとらえることができる。

日本セメントや興人のような装置産業でも、集約度の高いニ子や造船所ではなおさら、労働者はまさに金に値する。商店でもそうであるように、移動の少ない、安定したお客さんも、備員がいかに貴重なものであるか、責任者と少しづつ、こんな話をするとこのことを強く感ずる。ましてや仕事に創意を働かせ、フアイトのある熟練工は最高にありがたい。以前は地方から集った労働力は、都市メスが踏つていたが、今では地方でも需要が多くなった。今後は我が国の経済発展上に公害と労働力の問題が大きな障壁となりそうである。資本はあつても労働者が集らず倒産する場合さえあり得る時代となった。佐伯に於ても若い労働力の問題を巷間にきくとともにあるが、今のところ佐伯の工場では、安定性のある労働者がその職場を支えていることを責任者は語っている。それで労働者自身は自分等が貴重な存在であることを、もつと自覚する必要があると思ふ。近代的職能人とはその自覚の上で立って、自負と創意ある努力を続ける人を云うのである。

○市民と疎遠な佐伯工場

一画に倒をとつて見ると先進国が先ず工業をおこし、後進国を植民地化する。そこでは商品市場としてでなく、その土地の原料や材料を使って、安い労働力で利潤をおぼる。だから地域と協力関係を結ぶのでなく、収奪の形をとると云う方式が生まれる。このような過去の対外的植民地化政策の方式は、国内においても無関係ではない。地方にやってくる大企業と地域社会との関係がそれである。

しかしまた、地方の都市には独自の歴史や社会的地理的關係があつて、これら大中企業と接触して地域独自のコンミニユケーションができておける。例えて云うと但許市のようには、江戸初期から或は末期にかけて成立したもので、同じ食品工業でも戦後に進出して来たものと併立し繁栄している所は、地域住民の台所と直接結びつき、御上の産業という感情が強いのではないだろうか。また津又見市や延岡市は、巨大な一工業の傘下に入り、市民も市民の意識、感情も、それと離れては生活のできなぬ地域もある。ところが佐伯市の場合は大企業の日本セメントは市の中心より離れ、興人は長島山の陰にかくれて隔絶しているし、ニ子や造船所の原料、製品の取引はすべて海の彼方であつて、従業員こそ関係はあるが、一般市民はとらへばいささか疎遠である。こうして所に会社側は地域社会を無視して、何でも出来るという高い姿勢をとり勝ちになるのではないか。海に深い縁がある佐伯市民が、單に海岸部一部のものと見なし、比較的後背地の広さを持つために、公害に耐え強いの結果と抵抗が盛り上がる原因も、こういふ孤立地論

的なブランクがあるか否かはなかりかと考ふる。

工業立地要図 (日本産業図説)

条件	原料豊富	燃料豊富	用水豊富	陸上輸送便利	海運輸送便利	消費地に近い	労働力豊富	気候適切	公署処理容易	用地広
紙	◎		◎	◎	◎	○	○		○	◎
硫酸	◎	○	◎	◎	◎	◎			○	◎
糖	○	○	◎	◎	○	○			○	◎
糸			◎	○		◎	◎	○		◎
綿紡績			◎	○		◎	◎	○		◎
製糖	○	○		◎	○		○			◎
造船	○	○		◎	◎		○			◎
電気機械	○		○	◎		◎	◎			◎
セメント	◎	○	○	◎	◎	◎				◎
石油			◎	◎	◎	◎			○	◎

◎ とくに重視 ○ 重視 ○ 普通以上

八月十六日の読売新聞の大分版に「伊予の声」が
 ×、公署に佐伯市民は怒りを「の記事は、佐伯市民
 めんの好さや市民運動としての未組織化と反省させ
 られる嚆矢である。公署である新聞だからこそ思
 い切つたことを直言し、また人々に犬吠を厭憎を及
 ぼしていると思つて憤意をおぼえたものである。九
 州最大の組織をもつという佐伯消費生活協同組合や
 「佐伯市を育てる会」等、とくに佐伯市における大阪
 メント進出の抵抗ぶりは、西南戦争のさい賊軍に對して
 結束して當つたまゝの無縁ではなさそうに、おの地味な
 佐伯人の市民性か、そんなところを社会正義の火を吐い
 ているのではないか。両者にはそれぞれ複雑な利害關係

もあるらしい。しかし工場進出以前はこのような激しい
 抵抗ぶりを示しているのは、全国でも珍らしいというこ
 とである。こんな点に佐伯市民と佐伯市民のタイプの違い
 が出ているような気がする。佐伯市はあまりにも工場
 と地理的に疎遠であり、市民は精神的に疎遠であるので
 はないかと思ふ。
 港は佐伯の表玄関であるはずだ。

以上のように、佐伯の工業立地の地域的特色は、立地
 論上には志まれているが、それとよりまく産業風土、と
 くにその主要とす地域住民や市政の方の問題点がある
 ように思われてならない。(この項終り)

(前号正誤)

十五ページ下段、終りよか三行目、朝霧をついてと鶴谷港を
 一とあるところ、編集者の不注意から一行脱落しました。
 おお申します。次の通り。〇〇印の字挿入して下さい。
 朝霧をついて、風勢よく小波をたけつて、走る旅客船
 漁船は鶴谷港を斜に横切つて、一となりませす。

記録

漁村の迂蘭盆

一鶴見町羽出浦のいろいろ

社会奉助会員 安部 弥右衛門

(鶴見町羽出浦・八十三才)

この地方で昔からつづいてゐる正月、三月節句、五月節句、六月夏
 祭、七月迂蘭盆、九月秋祭など、生活に直接つながら行事といえ
 よう、そして長い年月を経過間にこれらの行事も漸次簡素化されて
 いるが、迂蘭盆だけは他の行事にくらべて、影響が少なく様である。